

〈新刊紹介〉

定延利之著『文節の文法』

本書は、文法を「発話」のゆるやかな規則性として考え直すことで、文節をはじめとする「文末満の断片」が、現実の発話の姿を解明する上で有用な概念となることを示している。とりわけ、ゆるやかな規則性を発話に見出す「手立て」として、「文法に「権力」「会話」「きもち」「非流ちょう性」を取り入れること」に主眼がおかれている。

本書の構成は次のとおり。「まえがき」「第1章 はじめに——文法をとらえ直す——」「第2章 組み合わせの文法ときもちの文法」「第3章 きもち・権力・会話を取り入れた文法」「第4章 非流ちょう性の文法」「第5章 こま切れの文法」「第6章 おわりに——文法と発話——」。末尾に「あとがき」「言及文献」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)
(2019年8月1日発行 大修館書店刊 A5判横組み 168頁 2,000円+税 ISBN 978-4-469-21375-1)

金澤裕之・矢島正浩編『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』

本書は、編者の一人である金澤裕之氏が中心となって収集・作成した明治・大正期の落語レコード作品(東京70余、大阪50余)の文字化資料公開に先立ち、これらの近代日本語資料としての有用性と、落語を研究資料として利用する際のヒントを示そうとするものである。落語資料の紹介と解説を行う第I部、落語資料の言語的な性格にアプローチする第II部、落語資料を用いて文法史、語用論史の究明を試みる第III部から成る。

構成は次のとおり。「なぜ落語資料なのか——序に代えて——(矢島正浩)」「I [解説] 録音資料としての落語」(「1 最初期日本語録音資料史の素描——録音再生装置の開発から出張録音時代まで——(清水康行)」「2 SP 盤落語レコードとその文字化について(金澤裕之)」)「II 言語資料としての落語」(「1 各種録音資料に見る、方向・場所を表す「へ」格と「に」格(金澤裕之)」「2 近世江戸語における指定表現の否定形——近世上方語および近代東京語・京阪語との比較——(岡部嘉幸)」「3 SP 盤落語レコード資料に用いられた語彙の「近代性」(小野正弘)」「4 東京落語と「標準語」(野村剛史)」「5 落語の「会話」と「地」の東西比較——接続辞使用傾向から見るスタイル——(宮内佐夜香)」「6 大阪落語 SP 盤文字化資料における「。」の加点状況——文のあり方を探る——(村上謙)」「7 文体面から見た偶然確定条件の諸相——落語 SP レコード・『夢酔独言』・尾崎紅葉の言文一致体小説を中心に——(揚妻祐樹)」)「III 日本語史における落語」(「1 SP 盤落語レコード資料における人の存在文(金水敏)」「2 SP 盤落語資料のダケ・バカリ(宮地朝子)」「3 上方語と江戸語の準体の変化——2つの変化の相違点と共通点——(坂井美日)」「4 不定の「やら」「ぞ」「か」の東西差と歴史的推移(川瀬卓)」「5 近代落語資料における行為指示表現の東西差——上方・大阪と江戸・東京の指向性の異なり——(森勇太)」「6 近代落語資料における順接条件系の接続詞的用法について(矢島正浩)」)。巻末に「あとがき(金澤裕之)」「執筆

者略歴」を付す。(田中佑)

(2019年8月31日発行 笠間書院刊 A5判横組み 323頁 4,900円+税 ISBN 978-4-305-70879-3)

石井正彦著『探索的コーパス言語学——データ主導の日本語研究・試論——』

本書は、従来のコーパス言語学の主流であったデータによって仮説を検証する「確認的な理論モデル主導型のアプローチ」に対する、データによってデータそのものを説明する「探索的なデータ主導型のアプローチ」の立場による事例研究と方法論的検討をもとに、コーパスを用いたデータ主導の日本語研究の可能性を論じようとするものである。

構成は次のとおり。「序章 探索的コーパス言語学とは何か」「第1部 共時的全文コーパスによる探索」(「第1章 低頻度語発生の記事機構(1)」「第2章 低頻度語発生の記事機構(2)」「第3章 文章不偏の無性格語は実在するか」「第4章 名詞的表現による文内情報提示の構造」「第5章 臨時的な四字漢語の文章内形成)」「第2部 通時的全文コーパスによる探索」(「第6章 「デフレから脱却する」——新聞におけるコロケーションの成立と変化——」「第7章 「不良債権処理」——新聞における語結合の一語化・語彙化——」「第8章 「ユビキタス」——論文標題における借用の位相——)」「第3部 多様なコーパスによる探索」(「第9章 多様なコーパスによる日本語研究の可能性」「第10章 教科書パラレルコーパスによる歴史叙述の対照)」「第4部 探索的データ解析による探索」(「第11章 探索的データ解析による日本語研究」「第12章 蛇行箱型図によるS字カーブの発見」「第13章 リジット解析による計数データの分析)。巻末に「文献」「初出一覧」「あとがき」「索引」を付す。(田中佑)

(2019年9月30日発行 大阪大学出版会刊 A5判横組み 388頁 5,700円+税 ISBN 978-4-87259-692-2)

黒滝真理子著『事態の捉え方と述語のかたち——英語から見た日本語——』

本書は、日本語と英語のモダリティを、認知言語学的なアプローチで包括的に捉え直すことを目指した書である。心の働きを映し出す表現であるモダリティを日英語間で比較し、話者の認知的スタンスや事態把握の仕方の異同を明らかにする。

本書の構成は次のとおり。「はじめに」「第1章 「ひと」との関わりで捉える「ことば」」「第2章 認知言語学の言語観」「第3章 事態の捉え方を表す表現としてのモダリティ」「第4章 モダリティの二つの捉え方」「第5章 モダリティの成り立ち」「第6章 二つの事態の捉え方」「第7章 事態把握とモダリティ」「第8章 主観的把握と〈自己のゼロ化〉とモダリティ」「第9章 展望——モダリティからみた認知類型論的特徴——」「おわりに」。末尾に「あとがき」「参考文献」「索引」「初出一覧」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年10月25日発行 開拓社刊 四六判横組み 208頁 2,000円+税 ISBN 978-4-7589-2583-9)

村木新次郎著『語彙論と文法論と』

本書は、著者が前著『日本語の品詞体系とその周辺』（ひつじ書房、2012年）以前に発表していた論文に、前著刊行後に新たに発表した論文数編を加えてまとめたものである。言語の両輪を成す語彙と文法、そして、それをつなぐ要素としての単語（学校文法における文節にあたるもの）という観点から、単語と文の関係、語彙の体系的性、伝統文法・日本語教育文法の問題点などについて論じている。ひつじ研究叢書〈言語編〉第156巻として刊行された。

構成は次のとおり。「まえがき」【I 語彙論と文法論とをめぐる諸問題】（「第1章 語彙と文法」「第2章 日本語の品詞をめぐって」「第3章 単語の意味と文法現象」「第4章 語彙と文法との境界」「第5章 「一ながら」の諸用法」「第6章 言語の対照記述をめぐって」「第7章 祝う・祈る・呪うの現代的用法」）【II 語彙の体系的性をめぐる諸問題】（「第1章 意味の体系」「第2章 語彙研究のために」「第3章 対義語の輪郭とその条件」「第4章 運動の強調表現——合成動詞の場合——」「第5章 現代語辞典の輪郭」「第6章 語彙教育」）【III 対照語彙論をめぐる諸問題】（「第1章 日本語の語彙と日本文化」「第2章 言語間の意味分野別語彙量の比較——日本語・中国語・ドイツ語の場合——」「第3章 巨視的対照語彙論のこころみ——ドイツ語と日本語を例として——」「第4章 日本語とドイツ語の「基本語彙」をくらべる」「第5章 日独両言語の自然現象の表現をめぐって」）【IV 文法論をめぐる諸問題】（「第1章 単語・品詞・動詞の活用をめぐって」「第2章 日本語教育文法の問題点」「第3章 日本語の文のタイプ・節のタイプ」「第4章 現代日本語における分析的表現」「第5章 日本語の形容詞は少ないか」「第6章 ヴォイスのカテゴリと文構造のレベル」「第7章 迂言的な受け身表現」「第8章 機能動詞の記述——日本語とドイツ語を例として——」「第9章 外来語と機能動詞——「クレームをつける」「プレッシャーをかける」などの表現をめぐって——」「第10章 連用形の範囲とその問題点」「第11章 日本語の後置詞をめぐって」「第12章 日本語文法への疑問——活用・ヴォイス・形容詞——）【V 書評4編】（「第1章 森岡健二著『日本文法体系論』」「第2章 八亀裕美著『日本語形容詞の記述的研究——類型論的視点から——』」「第3章 山橋幸子著『品詞論再考——名詞と動詞の区別への疑問——』」「第4章 宮岡伯人著『「語」とはなにか・再考——日本語文法と「文字の陥穽」——』）「あとがき」。(田中佑)

(2019年10月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 616頁 8,800円+税 ISBN 978-4-89476-936-6)

プラシャント・パルデシ・榎山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』

本書は、日本語学習者・日本語教師のために開発された、基本動詞の多義的な意味の広がり解説したオンラインツール「基本動詞ハンドブック」の作成過程において行われた成果をまとめた論文集である。「基本動詞ハンドブック」の特徴、多義語の分析、日本語教育への応用の3つのカテゴリーに分けられる14本の論文が収録されている。

本書の構成は次のとおり。「まえがき」に続く3部14章構成。「第I部 「基本動詞ハンドブック」の特徴」に「第1章 多義語の教育・学習の課題とその解決方法の一提案——「基本動詞ハンドブック」作成・公開の取り組み——（ブラシャント・パルデシ）」「第2章 基本動詞（多義動詞）の理解に役立つ視聴覚コンテンツ（今村泰也・高原真理・中溝朋子・夫明美・李相穆）」「第II部 多義語の分析」に「第3章 多義語分析の課題と方法（榎山洋介）」「第4章 多義動詞分析における付加詞要素の重要性（有菌智美）」「第5章 使用パターンに基づく多義動詞の語義認定（野田大志）」「第6章 多義動詞における中心義のずれと語義の文体的特徴——通時の変化を背景とした共時的意味の特徴——（木下りか）」「第7章 動詞「入る」の多義ネットワークにおける網目の拡縮（黒田史彦）」「第8章 多義語「とる」の語義ネットワークについて（今里典子）」「第9章 「決定」の意味を表す動詞の類義語分析——フレームに基づく日韓対照研究——（李澤熊）」、「第III部 日本語教育への応用」に「第10章 コーパスの日本語テストへの応用（今井新悟）」「第11章 「知る」「分かる」の類義語分析に基づく動詞類義語ハンドブックモデルの検討（高原真理・生天目知美）」「第12章 完了を表す複合動詞のコーパス調査——日本語類義表現学習辞典の作成に向けて——（砂川有里子）」「第13章 「遊ぶ」の意味と教え方について（加藤恵梨）」「第14章 〈表面接着〉から広がる「かける」の多義（梶川克哉）」を収める。末尾に「索引」「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019年11月16日発行 開拓社刊 A5判横組み 276頁 3,600円＋税 ISBN 978-4-7589-2277-7）

遠藤佳那子著『近世後期テニヲハ論の展開と活用研究』

本書は、江戸時代から明治初期におけるテニヲハの外延の変遷を活用表の仕組みから追及し、江戸時代のテニヲハ研究が明治以降の近代的文法研究にどう影響したのかを明らかにしようとするものである。平成30年度新村出記念財団刊行助成、ならびに、令和元年度日本学術振興会科学研究費補助金の助成を受けて刊行された。

構成は次のとおり。「はじめに」「序章」「第一部 完了「り」の学説史」（「第一章 完了「り」考——鈴木眼まで——」「第二章 完了「り」考——本居春庭以降——」「第三章 「自他」再考」）「第二部 命令形の学説史」（「第四章 「命令形」考」「第五章 続「命令形」考——明治前期における——」「第六章 「属」考——意味分類の試み——」）「第三部 八衢の系譜」（「第七章 黒川真頼の活用研究と草稿「語学雑図」」「第八章 黒川真頼における『詞八衢』の受容と展開」）「終章」「おわりに」「【附録一】東京大学国語研究室蔵 黒川真頼文庫目録〈語学之部〉小型本／黒川文庫 小型本 調査報告」「【附録二】黒川真頼 草稿『詞の栞』影印・翻刻（一部）」「【附録三】黒川真頼『詞乃栞打聴』翻刻」。巻頭に「巻頭言（服部隆）」、巻末に「参考文献・引用文献一覧」「初出一覧」「索引」を付す。

なお、本書は著者が2017年度に上智大学に提出した博士論文に加筆・修正を加えたものである。（田中佑）

福田嘉一郎著『日本語のテンスと叙法——現代語研究と歴史的研究——』

本書は、氏の博士論文「日本語の述語時間表現の機構と歴史」の一部を基に、加筆・修正を行ったものである。現代語研究と歴史研究のそれぞれの観点から日本語のテンスと叙法に関わる現象の記述と説明を、事実の観察に徹しながら行う。

本書は、「序」に続く、第Ⅰ部、第Ⅱ部と補章からなる。「Ⅰ 現代語研究」は「第1章 主節述語のテンスと観察可能時」「第2章 主節述語の叙法——確言のための必要条件——」「第3章 叙想的テンスの出現条件」「第4章 ラシカッタという言い方について」「第5章 モノダの統語的特徴と意味」「第6章 ノダと主体的表現の形式」。「Ⅱ 歴史的研究」は「第7章 中古語の非接続叙法体系」「第8章 条件表現の範囲——中古語の接続助詞がめぐる——」「第9章 朝鮮資料の成長性——捷解新語における叙法副詞がめぐる——」「第10章 説明の文法的形式の歴史について——「連体なり」とノダ——」を収める。「補章 日本語のアスペクトとその歴史的变化」。末尾に「初出一覧」「跋」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年12月20日発行 和泉書院刊 A5判横組み 256頁 3,600円+税 ISBN 978-4-7576-0938-9)

三原裕子著『江戸語資料としての後期咄本の研究』

本書は、明和～慶応に江戸で出版された後期咄本を取り上げ、そこに現れる言語の実態を江戸語（江戸時代に江戸という都市で行われたことば）の変遷上に位置付けることを通して、その江戸語資料としての価値を論じようとするものである。ひつじ研究叢書〈言語編〉第159巻として刊行された。

構成は次のとおり。「凡例」「はじめに」「序章」「Ⅰ 表記変化を促したもの」（「第1章 仮名の用法——装飾性から効率性へ——」「第2章 漢字の用法——読み易さの工夫——」「第3章 振り仮名の用法——読解補助の域を超えて——」）「Ⅱ 表記からわかること」（「第4章 『鹿の巻筆』写本の資料性——個人を想定する写本・大衆を想定する板本——」「第5章 語義意識の薄れと付加による表記の変化——「侍」「禿」「灯」——」「第6章 /i/を表す仮名遣いと作家の位相の違い——早稲田大学中央図書館蔵本『笑話本集』をもとに——」）「Ⅲ 語彙からわかること」（「第7章 [相の類]の役割を担った[体の類]——「醜い」から「夏芝居の累といふもので」へ——」「第8章 時間の表現を越える「日にち」の語彙——「明後日 御出」——」）「Ⅳ 上方語的要素を脱却していく語法」（「第9章 八行四段動詞と形容詞のウ音便形——共通語へつながる江戸語のウ音便形——」「第10章 格助詞「へ」と「に」の使用——座敷芸人の「に」・寄席芸人の「へ」——」「第11章 原因・理由を表す条件節——「によって」「ほどに」から「から」の使用へ——」）「Ⅴ 類型化と使用層の変化」（「第12章 助動詞「やす」の衰退——丁寧語から限られた男性の語へ——」「第13章 「ませ」と「まし」の交替現象——「まし」の流行と「ませ」への回帰——」「第14章 三笑亭可楽作品の「ござる」

—古臭さ・尊大さを表すために—」[第15章 前期喃本の「ござる」—文意を決定する本動詞から代替可能な補助動詞へ—] [終章] [付章 三笑亭可楽作「新作おとしはなし」における江戸語] [付録 早稲田大学中央図書館蔵「新作おとしはなし」翻刻ならびに注釈]。巻末に「謝辞」「参考文献」「本研究と既発表論文との関係」「事項索引」「人名索引」を付す。

なお、本書は著者が2017年1月に早稲田大学大学院文学研究科に提出した博士学位請求論文に加筆・修正を加えたものである。(田中佑)

(2019年12月25日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 516頁 8,800円+税 ISBN 978-4-89476-959-5)

横田きよ子著『外国地名受容史の国語学的研究』

本書は、江戸時代から近代に至るまでの、多様で複雑な文化的・社会的要因によって変化する外国地名受容の表記の変遷を実証的に明らかにするものである。第1部では台湾、ヨーロッパ、イタリア、スペイン、ロシアの5地名の記載例の調査から、第2部では外国地名の記載が多く当時影響力のあった文献から外国語地名の受容について論じる。

「序」に続く2部構成。「第1部 個別地名についての研究」に「1.「台湾」の呼称の変遷について」「2.「ヨーロッパ」の呼称の変遷について」「3.「イタリア」の呼称の変遷について」「4.「スペイン」の呼称の変遷について」「5.「ロシア」の呼称の変遷について」「第1部のまとめ」を、「第2部 外国地名資料についての研究」に「1.『蛮語箋』と『改正増補蛮語箋』の外国地名について」「2.二種の『改正増補英語箋』の外国地名について」「3.幕末期における外国地名受容法の揺れについて—柳河春三を例として—」を、「第3部 資料編」に「1.『新製輿地全圖』『坤輿圖識』『坤輿圖識補』影印」「2.『新製輿地全圖』『坤輿圖識』『坤輿圖識補』地名索引」を収める。末尾に「初出一覧」「後書き」を付す。『新製輿地全圖』『坤輿圖識』『坤輿圖識補』の影印と外国地名索引のPDFデータを取めたDVD-ROM付属。(阿久澤弘陽)

(2019年12月25日発行 和泉書院刊 A5判横組み 304頁 7,000円+税 ISBN 978-4-7576-0917-4)

飛田良文・佐藤武義編集代表、安部清哉編、山本真吾・橋本行洋・田中草大・橋本博幸・安部清哉・辛島美絵・鈴木功眞・山田潔・小林千草・染谷裕子・濱千代いづみ・岸本恵実・蔣垂東著『シリーズ〈日本語の語彙〉3 中世の語彙—武士と和漢混淆の時代—』

本書は、現在の研究の最前線を踏まえ、新しい視点・成果を提示するために企画・編集された『シリーズ〈日本語の語彙〉』の一冊として刊行されたものであり、和語と漢語の混淆が深化していく中世の語彙を、武士や知識階層の資料、一般にも広く受容された資料、外国人が使った日本語資料などから探っている。

構成は次のとおり。「序 中世の語彙への誘い(安部清哉)」「第1部 武士階層と和漢混淆の発展」(第一章『平家物語』の語彙(山本真吾))「第二章『太平記』の語彙(橋本行洋)」

「第三章 『吾妻鏡』の語彙（田中草大）」「第四章 『古今著聞集』の語彙（橋本博幸）」「第2部 漢字・漢語の広がり」と規範の変化」（「第五章 連語から見た『徒然草』——連語型文末表現と文体——（安部清哉）」「第六章 古文書の語彙（辛島美絵）」「第七章 『倭玉篇』の語彙（鈴木功眞）」「第3部 口語世界の拡大」（第八章 「抄物の語彙（山田潔）」「第九章 狂言集の語彙（小林千草）」「第一〇章 御伽草子の語彙（染谷裕子）」「第4部 外国人がとらえた日本語の近代語化」（「第一章 天草版『平家物語』の語彙（濱千代いづみ）」「第一二章 『日葡辞書』の語彙（岸本恵実）」「第一三章 中国資料の語彙（蔣垂東）」）。巻末に「執筆者紹介」「索引」を付す。（田中佑）

（2020年1月1日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 224頁 3,700円＋税 ISBN 978-4-254-51663-0）

計量国語学会編集『計量国語学事典 新装版』

本書は、言語・言語行動の量的側面に関するこれまでの研究成果と今後の展望を67名の執筆者が解説した『計量国語学事典』（朝倉書店、2009年）の新装版である。装いを新たにすることで手の届きやすい価格となった。

構成は次のとおり。「0. 計量国語学概説」「1. 音声・音韻」「2. 文字・表記」「3. 語彙」「4. 文法・意味」「5. 文章・文体」「6. 社会言語学」「7. 方言」「8. 国語史」「9. 日本語教育」「10. 日本語処理」。巻頭に「序」「編集委員・執筆者」「計量国語学会設立のころ」、巻末に「計量国語学会結成趣意」「計量国語学会年表」「索引」を付す。（田中佑）

（2020年1月5日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 423頁 7,800円＋税 ISBN 978-4-254-51064-5）

平田秀著『三重県尾鷲方言のアクセント研究』

本書は、氏が2015年に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士論文を改稿したものである。「3種の式の対立をもつ」「式のかかわる tone sandhi（連続変調）の現象がみられる」という、尾鷲方言のもつ2点の音韻の特徴に主眼をおきながら、尾鷲方言の共時的なアクセント体系の詳細についての記述をおこなっている。

本書の構成は次のとおり。「まえがき」「第1章 序論 尾鷲市の地理と本書で扱うデータ」「第2章 日本語諸方言のアクセント」「第3章 尾鷲方言のアクセント体系について」「第4章 尾鷲方言の音響分析」「第5章 類別語彙との関連」「第6章 和語の単純名詞のアクセント」「第7章 複合名詞のアクセント」「第8章 外来語のアクセント」「第9章 単純動詞のアクセント」「第10章 形容詞のアクセント」「第11章 助詞のアクセント」「第12章 尾鷲地区の周辺地域諸方言のアクセント」。末尾に、「参考文献」「語例」「あとがき」「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020年1月27日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 192頁 7,300円＋税 ISBN 978-4-8234-1009-3）

荒川清秀著『漢語の謎——日本語と中国語のあいだ——』

本書は、日本語と中国語で漢字表記を共通にする語（日中同形語）を対象に、それがなぜ、どこで、どのように出来たのかといった出来方をめぐる謎を明らかにする。各章の終わりには「日中同形語の窓」というコラムが付され、日中同形語としてよく話題になる語についての知見が示されている。

本書の構成は次のとおり。「序章 漢語の日中往来」「第1章 「電池」になぜ「池」がつくのか？——身近な用語の謎——」「第2章 「文明」「文化」は日本からの逆輸入？——日本から渡った漢語——」「第3章 「半島」「回帰線」はどうできたか？——日本での漢語のつくられ方——」「第4章 なぜ「熱帯」は「暑帯」ではないのか？——中国での漢語のつくられ方——」「第5章 「空気」は日中双方でつくられた？——成り立ちに謎がある漢語——」「終章 日本語と中国語のあいだで」。末尾に「あとがき」「参考文献」を付す。（阿久澤弘陽）

（2020年2月10日発行 筑摩書房刊 新書判縦組み 272頁 860円＋税 ISBN 978-4-480-07285-6）